

成果の説明書

(氏名) 藤井孝宗	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p><研究></p> <p>今年度は科学研究費基盤研究(C)「海洋資源輸出は資源枯渇を悪化させるか：計量分析に基づく資源保護政策への示唆」の2年目であり、引き続き本研究に邁進した。ただ、昨年度からのコロナ禍により、資料、統計収集のための調査出張が十分出来ず、研究計画が順調に進んでいるとは言いがたい。研究書籍や学術論文の調査によりできるだけ埋め合わせを試みたものの、厳しい研究環境であった。次年度以降は多少なりとも状況が改善すると期待しており、できる限り取りかえしていきたい。本科研費プロジェクト以外の研究成果としては、2020年にポーランドのヴロツワフ経済経営大学で開催された、本学とヴロツワフ経済経営大学との国際学術シンポジウムの研究成果が2021年9月に以下のタイトルで書籍として刊行された。</p> <p>Boguslawa Drelich-Skulska & Mami Hiraike Okawara (eds.) (2021), “Current Trends in the Global Economy: From the Perspectives of Japan and Polish Economists”, Wroclaw University of Economics and Business.</p> <p>藤井は本書の第1章“Recent Trends of Mega-regional Integration and Global Value Chain Upgrading in the Asia-Pacific Region”の執筆を担当した。本稿はコロナ禍前の近年のアジア太平洋地域のメガ地域統合の動向とそれに伴うグローバル・バリュー・チェーンの深化、高度化の状況をまとめ、今後のこの地域の経済発展のあり方への考察とヨーロッパなど他地域との比較を行ったものである。本学とヴロツワフ経済経営大学との国際学術交流は、これまで高崎とポーランドで1回ずつ国際シンポジウムを開催することにより多くの成果を上げているが、このたび書籍としてそれらの成果がまとめられたことは大変嬉しく思っている。</p> <p><教育></p> <p>教育についても、今年度は昨年度に引き続きコロナ禍への対応により大幅な活動縮小、変更を余儀なくされた。特に本年度はリモート講義と対面講義の併用が求められたため、準備などの対応に多大な労力が必要となった。両方の講義形式のための準備を一度に行わなければならないというのはかなり難しく時間も取られると感じた。一方で、離れていても zoom など簡単にゼミ学生などと打ち合わせができる点、課題や教材をネット teamsなどを介して配布、回収できる点などは、教育システムの活用により便利になる点であり、コロナ後も何らかの方法で続けていければと思う。</p> <p>また、国際学科所属ゼミとして、例年は国際活動を積極的に行っているのであるが、昨年度に引き続き今年度もコロナ禍のため海外語学研修、海外フィールドワークなどの活動が全てできなかった。仕方がないことではあるが非常に残念といわざるを得ず、ゼミ活動の中心的なものが失われてしまったため学生の落胆も非常に大きかった。次年度は海外語学研修事業については開催をめざしているようであるが海外フィールドワークについては不透明なままであり、活動が十分出来るかどうかはわからない。ただ、現在の4年生、3年生はこのままでは海外での課外活動を行わないまま卒業することになってしまい、大変残念であるため、できる限り何らかの活動が出来るよう努力してみたい。</p> <p><学務></p> <p>本年度より入試担当学部長補佐として、主に入試業務を担当している。入試運営委員会、入試課題検討委員会の議長としての司会とともに、入試問題の作成などに関する調整や入稿、印刷、仕分けなどの事務作業、教員の業務担当シフトの作成などを行った。本年度の経済学部入試の結果としては、昨年度より多少受験者数は持ち直したもののト</p>	

レンドとしては受験者の減少傾向が続いており、今後何らかの対策が必要となってくるだろう。また、本年度から来年度にかけて、高校の新学習指導要領に対応するための入試制度、内容の変更を考えなければならず、この部分も悩ましいところである。次年度には何らかの結論を出さなければならない。また、教務関連としては、カリキュラム検討委員会のメンバーとして活動し、本学部の3ポリシーの改訂に係わった。ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーとも、既に作成されたものは合ったが現状にそぐわない部分もあったため、より経済学部をめざすべき目標を反映されたものに改訂できたと考えている。これらの3ポリシーを踏まえ、次年度以降はカリキュラムツリー、カリキュラムマップの作成に移っていくことになるだろう。

2 その他の事項

教育の工夫として、昨年度に続き1年生むけ必修科目である「市場と経済」という経済学の入門講義について、e-learning教材を導入し、演習課題の強化とそれによる学生の復習の効率化・強化をはかるためのチャレンジを行っている。

3 次年度以降の計画・抱負

今年度も引き続きコロナ禍により研究、教育、学務とも大幅な活動の縮小、修正を余儀なくされた。次年度もコロナ禍の状況次第では今年度同様の研究教育活動への制約が予想されるが、できる限り研究、教育ともに進めていきたい。

研究については、現在行っている科研費研究プロジェクトを引き続き進めていく。過去2年の研究がコロナ禍のため調査出張、学会発表の出張ができていないため、出来るだけ遅れを取り戻しつつ本年度の研究を進めていきたい。

学務については、引き続き経済学部入試担当学部長補佐として、入試制度の適切な運営及び評価、見直しなどについても積極的に取り組んでいきたい。特に高校の新学習指導要領に対応する入試制度、内容の変更については次年度中に何らかの対応の方向性を決めなければならないため、検討すべき事は数多い。

授業については、コロナ禍の状況次第ではあるものの、可能となれば今年度できなかったゼミにおける国際的な活動、海外へのフィールドワークを再開し、学生が国際感覚を養うための活動を行っていききたいし、他大学ゼミとの合同研究発表会を通じた他大学学生との交流なども行っていききたい。